

<国際学会参加記>

第4回日欧古代地中海世界コロキウム

佐藤

昇 (神戸大学)



研究報告に聞き入る

第4回日欧古代地中海世界コロキウムが、2018年9月3日から7日にかけて名古屋大学で開催された。これまで桜井万里子氏（東京大学）、周藤芳幸氏（名古屋大学）、そして筆者などを中心に、4年に一度ほどのペースで開催してきたこのコロキウムも、今回で第4回を数える（第1回：2005年、ロンドン大学古典学研究所、第2回：2009年、東京大学、第3回：2014年、在アテネ英国考古学研究所）。今回は、周藤氏が代表を務める科研費基盤研究Aの参加メンバーを中心として数年前から準備を進めてきた。学術面でも、2017年度の西洋史学会大会シンポジウムをはじめ、これまでに着実に成果を積み重ねてきていた。

今回の報告者は、総勢20名となった。日本人報告者は8名、海外からは12名の報告者が来日した。C. Morgan氏（Oxford）やP.J. Rhodes氏（Durham）など、過去のコロキウムに参加して下さった方もいたが、海外の研究者は大抵、今回が初めての参加であった。前回までと比べると碑文学、美術史学の分野がいくらか厚くなったと言えるだろうか。コロキウムの名称には第1回から「日欧」の名が冠されているが、今回はその枠を超え、イスラエルやアメリカ合衆国から複数の研究者を招聘することとなった。報告者の人選や招聘については、師尾晶子氏（千葉商科大学）や長田年弘氏（筑波大学）、筆者などが当初の調整を行なったが、最終的に移動や

宿泊を含めた種々の手配に関しては、周藤氏と名古屋大学のスタッフが全てを見事に取りまとめてくださった。このコロキウム開催のために各方面と長時間にわたる交渉をしてくださったとのことで、大変なご苦労だったと拝察される。記して感謝する次第である。

開催直前、何より懸念されたのは台風であった。どうやら2018年は当たり年のようで、幾つもの大型台風が各地に例年のない爪痕を残していった。8月末に発生した台風21号も、非常に強い勢力を保ったまま日本列島に接近していた。筆者自身、コロキウム直前まで研究報告・調査のためにオックスフォード・ケンブリッジにおり、帰国が遅れるのではないかと気が気ではなかった。そして実際、この台風は9月4日に上陸し、大きな人的・物的被害をもたらすことになる。関西国際空港の浸水・橋脚破損などについて、ご記憶の方も多いただろう。ところが何とも幸いなことに、今回のコロキウムで報告する研究者に関しては、この台風の影響をさほど大きく被ることもなかった。飛行機が多少遅れることはあったにせよ、日本人研究者の帰国や外国人研究者の来日日程が著しく狂うこともなく、また台風が名古屋付近を通過したのも、会場内で研究報告が行われている時間帯であったため、朝晩の移動にさえも台風の影響を殆ど受けずに済んだのである（海外の研究者たちが、7階にあるコロキウムの会場から、窓越しに見える暴風雨の様子をしきりとカメラに収めていたのは、大変印象的であった）。結局、天候面では非常に恵まれた会となった。

コロキウムの中核となる研究報告は、4日から6日まで3日間にわたって行われた。共通論題は「古代地中海世界における知の伝達と組織化 Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World」。報告者それぞれが、自分の専門分野に即して、古代地中海世界における知識や技術、情報の伝達や組織化の実態、特殊性、問題点などについて論じた。エーゲ海世界はもちろん、ローマやエジプトなども加えた東地中海世界全体を舞台に、先史時

代から後期ローマ帝国時代に至る広範な時代が扱われた。古代の歴史家達が扱う情報源の問題や、碑文が伝える情報の性格、形式の問題、演説・口承による知識伝達の諸側面、法律や行政、宗教、権力、社会秩序に関する知識の伝達の実情、特性、意義、さらに経済活動や美術品制作に関わる技術・知識の伝達など、実に多様な側面から議論が展開された。議論は多岐に及んだが、しかし決して散漫になり過ぎることもなく、少なくとも「知の伝達と組織化」というテーマを、それぞれの専門分野の中で正面から受け止めた報告が殆どであった（共通テーマに含まれる「knowledge」の定義について後に議論となったのは、そうしたことの現れでもあるだろう）。実証度、完成度の極めて高いものもあれば、まだ構想段階で、非常に野心的、刺激的な報告もあった。

報告はいずれも興味深かったが、紙幅の都合上、ここで全てを紹介するわけにはいかない。関心のある方は、古代ギリシア文化研究所の活動報告ページから要旨集をご覧いただきたい(<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ancient-greek/activity.html>)。一例を挙げるならば、古典期アテナイの会計碑文が伝える情報の選択性について論じた E. Meyer 氏 (Virsinia) や、碑文における数字の表記について論じた J. Blok 氏 (Utrecht) の報告などは堅実かつ興味深いものであった。また K. Vlassopoulos 氏 (Crete) と B. Kowalzig 氏 (N.Y.) の報告などは、挑戦的で刺激的なものと感じられた。前者はギリシア文化の伝達のあり方、独自性について独特の見通しを示し、後者は文化圏を超えて信仰されていた神格ペアに注目して、宗教上の知の伝達のあり様を荒削りながら描いて見せた。日本人では、例えば、中野智章氏 (中部大学) によるエジプト王権の表象に関する報告や、芳賀京子氏 (東京大学) によるローマ皇帝像の地方伝播に関する報告なども興味深く、手堅い報告だと感心させられた。筆者自身は古典期アテナイの演説における野次対策を、知識・情報伝達の障害という観点から論じた。充実した報告に刺激を受け、会場からの質疑に

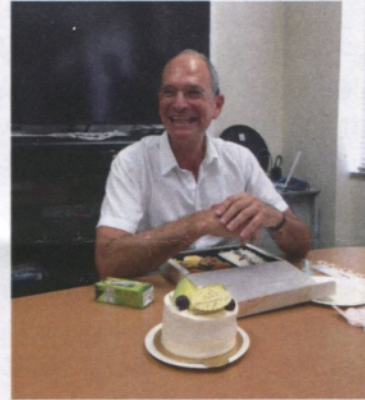
も熱がこもり、鋭い意見の応酬となることもあった。丁々発止は言い過ぎにしても、途切れぬ質問に、筆者などは司会をしながらかく時間内にまとめられずに、恥ずかしながらまごついてしまう始末であった。



内外の研究者が交流する昼食風景

厳しい質問が飛ぶこともあったとは言え、基本的には終始アットホームな雰囲気の中でコロキウムは進行していった。偶然にもこのコロキウム期間中に I. Malkin 氏 (Tel-Aviv) が誕生日を迎え、運営側からサプライズでケーキがプレゼントされたことも、そうした雰囲気を盛り上げた。また閉会に際して、このコロキウムを長年支えてきた桜井氏と Morgan 氏に対し、関係者から功労を称える記念品の贈呈が行われたが (Morgan 氏は、第 1 回から前回までヨーロッパ側参加者のアレンジを担当して下さった)、これも心地よい会の雰囲気を象徴するものとなった。この他、昼食時間や休憩時間には報告者以外の一般参加者も含めて、日本人研究者と海外の研究者が共に机を並べて、研究の話や大学環境の話、日本の文化や各国事情などについて会話を弾ませた (こうした食事や喫茶の準備、その他会場の準備などには、名古屋大学の学生さんたちに全面的にご協力いただき、滞りなく進めることができた。これについても記して深謝する次第である。また数多く参加して下さった報告者以外の皆さんにも同じく感謝したい)。さらに研究報告会に付随して行われた、徳川美術館や伊勢神宮への巡検、そして毎晩の夕食、懇親会などもまた和気藹々とした、そして賑や

かな雰囲気の中で行われたことは言うまでもない。川本悠紀子氏 (名古屋大学) が建築学の知識と巧みな英語で大変上手に先導して下さり、巡検の方も大変充実したものとなったことを特記しておきたい。



サプライズの誕生日ケーキに喜ぶ Malkin 氏

今回のコロキウム自体は、学術的にも、交流の機会としても大成功と言って良いであろう。数年をかけた大きなプロジェクトではあったが、しかしこれでようやく終わったと言って息をついている暇もあまりない。コロキウムの学術的成果は、現在、論集として海外の出版社から出版する計画を進めている。論集の編集はまた大変な作業になることが予想されるが、あまり時間をかけ過ぎることなく、何とか良いものに仕上げられるようにしてゆきたい。そして第 5 回コロキウムに向けた準備もすでに始動している。次回は 2022 年に開催することを計画している。この時までには、また充実した研究発表会が行えるよう、再び諸々の体制を整えてゆかなければならない。同時並行で他のプロジェクトなども進めてゆかざるを得ないのだが、できるだけ浮足立たずに根幹となる研究はおろそかにせず、しっかりと深めてゆき、そして学術振興にも寄与してゆきたいところである。